

季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM
QUARTERLY

URL <http://www.general-museum.fks.ed.jp>

75

冬の収蔵資料品展

衣と暮らし

—東北の仕事着コレクション—

福島県立博物館



サシコハンテン（福島県南郷村 福島県立博物館蔵）

東北地方は本州の北部に位置し、日本海と太平洋に面し、気候的にもそれぞれ独自の風土を持っています。また冬期間は豪雪寒冷の地や、比較的温暖な地域などさまざまな文化が育まれてきています。このような気候の相違による文化は、服装文化に表われます。見方を変えれば、服装からその土地の気候を見ることもできます。東北地方という寒冷積雪地における労働時の服装、仕事着と呼ばれる服装は東北地方の風土をよく表現したものと いえます。冬の収蔵資料展「衣と暮らし―東北の仕事着コレクション」は、東北地方各地の仕事着をとおして、衣の民俗を紹介します。

東北地方の仕事着は、近世の江戸時代中期ごろに形成されたようです。会津地方の一般的な野良仕事の仕事着であるヤマジバンとサルツパカマは、文化四年（一八〇七）の風俗帳などによると、近年「猿袴」が田植えに着用され始めたこととあります。また青森県津軽地方の『奥民図彙』（天明寛政年間一七八一―一八〇〇）によると、コギン着装の農民の姿や庄内地方の『大泉四季農業図』（江戸後期 一九世紀前半）には、肥引種の仕事着が描かれており、各地の博物館等に収蔵されている仕事着も、近世の絵画や風俗帳などの記録からも見ることができます。このような仕事着は、東北各地の農・山・漁村で昭和二十年代まで一般的に見られました。戦後の急激な服装の変遷により、いつしか姿を消してゆき、博物館等にわずかに保管されている状況といえます。

当館にこのたび、故渡部元真氏が長年にわたり収集保管されてきた東北地方の仕事着コレクション（一三二〇点）が寄託されました。渡部氏は、会津地方の仕事着を収集し、これらを調査研究し、現在「会津の仕事着コレクション」（四七六点）として福島県指定重要有形民俗文化財に指定保管されています。寄託された資料は、指定外の会津地方の仕事着の他、新潟県・北海道のアイヌの衣裳をはじめ東北各地の仕事着が主です。今回の収蔵資料展は、渡部コレクションと館蔵の仕事着を展示します。その主な資料を紹介します。

東北地方の風土が生んだ仕事着のひとつに刺子があります。刺子は、本来は布を強靱にすることから、布二、三枚を縫い合せ刺していったところから生れました。わが国では、衣料として木綿が広く着用されるようになるのは、江戸時代になってからです。東北地方で木綿が栽培されるのは、福島県など南部の地域です。貞享元年（二六八四）の『会津農書』には、木綿の栽培の記述があります。木綿以前の衣料は、主に麻とか苧麻でした。青森県津軽地方では、江戸時代に農民が木綿の仕事着を着用することを禁じていました。冬期間の津軽地方では、寒さを防ぐ方法として、目の粗い麻の織目をふさぐように、最初は麻糸や木綿糸で刺していったのが、コギンです。最初は目をふさぐ目的でしたが、装飾を兼ね、また魔除けや縁起のよい模様や山道など、さま

冬の収蔵資料品展

衣と暮らし ―東北の仕事着コレクション―

●会期 平成17年1月15日(土)～3月21日(月)



サシコソデナシ（山形県庄内地方）



コギンキモノ（青森県津軽地方）

さまざまな模様で刺されるようになりました。同様の方法で青森県旧南部領域の南部菱刺があります。これらは青森県の風土が生んだ最高の農民芸術といえます。

刺子の仕事着として、庄内地方の刺子があります。ジバンやソデナシに刺したものが主です。「つづれ刺」などと呼ばれ、木綿布二枚を拵目に刺します。刺したものを藍染にして、刺模様を見えにくくします。何度も洗たくしているうちに刺糸が白くでてくるものです。また庄内地方の肥引き櫛を引くときに着用するソデナシがあります。これはつづれ刺にしたものに、櫛の引網のあたる肩や胸部に柿の花・山道・重菱などの模様を刺した布をあてたものがあります。米どころ庄内地方の仕事着として注目すべきものです。

会津地方の刺子には、南会津郡南郷村や伊南村など伊南川流域の刺子があります。主にハンテンに麻の葉・井桁・七宝・拵などの幾何学模様を刺したもので、明治初期ごろまで製作されてきました。大堰と呼ばれる田植え前の用水引きの工事や、建前など共同作業に着用された一種の晴着です。また会津若松市東山町湯ノ入地区のサシコワンバリと呼ばれるものがあります。全面に平刺しに刺したもので、肩などに柿の花・山道などの模様刺をほどこしたものもあります。

刺子のほか、古着の布などを裂き糸にした裂織のジバン・ソデナシや、麻のジバン・ソデナシ、糸をこよりにして横糸にして織ったシフ（紙布）、和紙を材質としたカミコ（紙子）など、衣料の変遷を示すもの、大漁祝着として着用されたマイワイ（万祝）など晴着としての仕事着もあります。東北各地の仕事着とおして、東北地方の風土やその厳しい自然に生きた人々の衣と暮らしを御覧ください。

主な展示資料

- 庄内のサシコジバン・サシコソデナシ（山形県）
- 庄内のサキオリジバン・サキオリソデナシ（山形県）
- 津軽のコギン・南部の菱刺（青森県）
- 秋田のナガテスグイ（秋田県）
- 白石のカミコ・シフ（宮城県）
- マイワイ（宮城県）
- 南郷のサシコ（福島県）
- 湯ノ入のサシコワンバリ（福島県）など

収蔵資料品展「衣と暮らし 東北の仕事着コレクション」は平成一七年一月一五日（土）から三月二日（月）まで開催しています。観覧料 常設展観覧料をご覧ください。



マイワイ（宮城県）



サシコワンバリ（福島県会津若松市東山町）

会期中の関連行事

民俗講座「東北の刺子と民俗」(上映・解説会)
日時 一月二三日(日)午後一時半～三時
講師 学芸員 佐々木長生
会場 視聴覚室

企画展「ふくしまの工芸」記念七絃琴演奏会

平成一六年二月三日（水・祝）

「江戸の音色・唐土の音色」

奏者 琴人 飛田 立史氏

博物館の秋の企画展「ふくしまの工芸」では、江戸時代後期の文人・浦上玉堂が作った七絃琴という楽器も展示しました。古琴とも呼ばれ中国で古代から演奏されてきた七絃琴は、昨年無形の世界遺産に選定されています。日本へは奈良時代にもたらされましたが一時途絶えてしまいました。

江戸時代前期に再び中国より伝えられ、中国への憧れを抱いていた文人たちに受け入れられます。玉堂もそのような文人の一人でした。玉堂は岡山藩を脱藩して江戸にいたところ、会津藩から猪苗代にある土津神社の神楽復興の依頼を受け、会津にしばらく滞在しました。会津でも愛する七絃琴を作っていた



ます。琴の材料となる桐と漆を産する会津は、玉堂にとっても嬉しい土地だったかもしれません。現在ではあまり馴染みのなくなってしまう七絃琴が、どのような音色を奏でるのかを知っていただきたくて、展示にあわせて演奏会を企画しました。

奏者の飛田立史さんは、郡山市在住の七絃琴演奏家。中国に留学して北京・上海で七絃琴の演奏を学ばれました。日本人でありながら、その演奏や精神は中国でも「正統派」との評価を受けています。現在は日本のみならず中国でも活躍です。

当日は、飛田さんの軽妙なトークで、七絃琴の大きさや形が持つ意味や、楽譜の読み方などを説明いただきながら演奏が行われました。

演奏していただいた曲目は全七曲。美しい夜をイメージした『良宵引』。一日の仕事を終えた獵師がぼろ酔いで樽を漕ぎ、唄う情景を表現した『酔漁唄晩』。亡くなった人を偲ぶ『憶故人』。寒空を飛ぶ雁に故郷を思う旅人の心を重ねた『平沙落雁』。高山から湧き出でた溪流がやがて大河となつて海に注ぐ様を表した『流水』。

これらはいずれも中国で演奏されてきた曲、唐土の音色です。七絃琴の弦が弾かれる音、こすられる音が紡ぐそれぞれの情景は、聞く者を、花の香り漂う美しい夜や、激しく流れる川の水面へと運んでくれるかのようでした。

中国当代の詩人・李白の漢詩に節をつけた『子夜呉歌』は、江戸時代に中国から七絃琴が再びもたらされた際に、

日本に入ってきた曲です。最後に演奏していただいた『人左』は、熊沢蕃山という江戸時代の儒学者の詞に、玉堂が催馬楽の節を合わせた曲。二曲とも江戸時代の人々が歌い、楽しんだ江戸の音色です。『人左』の詩を紹介しておきましょう。

ひととはがむと とがめじ ひとはいかると いからじ
いかりとよくをすててこそ つねに「こら」はたのしめ
含蓄のある、考えさせられる歌詞です。



演奏会の最後に、通常展示室のケースの中に展示している玉堂自作の七絃琴も爪弾いていただきました。残念ながら弦の音程が調わず、本来の音色を蘇らせることはできませんでしたが、二〇〇年前に玉堂が楽しんだ調べを皆さんにもお楽しみいただけたのではないかと思います。これを機会に、中国や日本で愛されてきた七絃琴という魅力あふれる楽器が、少しでも皆さんの心に残ることを願っています。

（美術担当 小林めぐみ）

会津の基盤岩「大戸層」

竹谷陽二郎 自然担当

西会津町奥川や、山都町一ノ戸川など、飯豊連峰の山麓を流れる河川の上流部には、ほかの地域に比べたいへんち密で硬い岩石が露出している。この岩石は、会津地域の基盤をなす地層で、大戸層と呼ばれている。大戸層という名は、会津盆地南方にそびえる大戸岳に由来し、そこにも、同様の岩石が分布している。

私は、大戸層の成り立ちを調べるために調査を進めている。地層の調査は沢を調べるのが最適である。沢では水の浸食により岩盤が露出しているからである。ただ、飯豊山麓の沢は長く険しいので調査はたいへんである。胴長を着込んで水に腰までつかるが、転んで頭まですぶぬれになることがある。滝があるとそれを迂回するために崖をよじ登ったりする。鈴を鳴らし、熊に注意しながら進まねばならない。でも上流部は水がとてもきれいである。秋などは紅葉がみごとで、まさに桃源郷のような自然を感じるができる。

大戸層を特徴づける岩石はチャートである。チャート



山都町宮古川上流にある落差20mの滝

とは、珪質（シリカ）の成分を九五%以上含む、半透明でとても硬い岩石である。黒・白・茶などさまざまな色をもつ。チャートは、主に、放散虫という珪質の殻をもつプランクトンの遺骸が海底に堆積して形成された。チャートのほかに、黒灰色の粘板岩と灰色の砂岩、砂岩と粘板岩が繰り返し堆積した互層が見られる。粘板岩は海中に浮遊している泥がゆっくりと海底にたまったもので、砂岩は水流で運ばれてきた砂粒が堆積してできたものである。

この地域に分布する大戸層は、主に北北東 南南西方向の地層の延びをもち、東または西に高角で傾き、チャート・泥岩・砂岩がセットで、断層により何回も繰り返している。山都町一ノ木の水無林道では、激しく折りたたまれた見事なチャートの褶曲が観察できる。地層はもともと海底などに泥や砂が水平に堆積してできたものなので、地層が高角で傾斜し褶曲しているということは、地層が堆積した後で激しい運動をうけて変形したことを示している。

大戸層の泥岩から、放散虫の化石を発見することができた。化石の種類から、堆積の時代が中生代のジュラ紀白亜紀であることが判った。大戸層からは、貝など浅い海に生息している化石の報告はない。このことと堆積物の特徴から、大戸層は深い海の底で形成された地層と考えられる。

実は、大戸層と同じような岩相・構造・時代をもつ地層は、日本列島の中軸部に広く分布している。現在では、これらの地層はジュラ紀に海溝付近で形成されたと考えられている。この考えの基本になっているのがプレートテクトニクス理論である。地球は、厚さ一〇〇キロメートルほどのプレートとよばれる一〇数枚の岩盤（リソスフェア）で覆われていて、それぞれがマントル最上部の軟らかい層（アセノスフェア）の上を、一年で数センチメートルというゆっくりした速さで水平移動している。プレートは、海嶺とよばれる海底にある玄武岩質マグマ



Vの字に折りたたまれて褶曲したチャート
山都町一ノ木 水無林道

の噴き出し口で生まれ、新しい海洋底を海嶺の両側につくっていく。その海洋プレートは日本海溝のような海溝で大陸プレートの下に沈みこむ。

ジュラ紀には日本列島はまだ存在せず、アジア大陸の東の縁に海溝があった。陸から遠く離れた深海の海洋プレート上には、陸から運ばれた泥が屈かず、もっぱらプランクトンである放散虫の遺骸が堆積してチャートが形成された。海溝や、陸から海溝にいたる斜面では、ゆっくりと海底に泥がたまり、時々浅いところから海底地すべりによって砂が運ばれ堆積し、砂と泥の互層が形成された。海洋プレートが海溝で陸のプレートの下にもぐりこむ時、陸側の堆積物（泥や砂）の中に、玄武岩質の海洋プレートや海洋プレート上に沈積した堆積層（チャートなど）がはぎとられ、次々に陸側に付け加わった。これを付加体とよんでいる。付加体では、地層が断層や褶曲により激しく変形した。このようにして大戸層は形成されたであろう。そして、その後白亜紀にそれは隆起し陸地となった。

アジア大陸で恐竜が闊歩していた頃、大陸東縁の海溝ではこのようなドラマが進行していたのである。大戸層の地層を調べることは、日本列島を含んだ極東アジアの成り立ちを知る上で、重要な意味をもつと思う。

Q：企画展「戊辰戦争といま」の説明に、母成峠で会津藩と仙台藩が戦ったとありましたが、両藩は味方同士ではなかったのですか？

A：その通り、奥羽越前藩同盟の仲間です。でもそれは慶応四年閏四月中旬以降になってからのことです。正式には五月三日に盟約書へ調印が行われた日から味方同士になりました。ですから一月から始まる戊辰戦争初期、会津藩は朝敵とみなされ仙台藩は新政府側の奥羽鎮撫総督の命に従い、会津藩と戦っていたのです。

一月三日、鳥羽伏見の戦いに端を発した戊辰戦争。朝敵となった会津藩主松平容保は二月には国元へ帰り、三月には軍政改革に取り組みます。一方新政府側は、九条道孝を奥羽鎮撫総督に任命し、仙台へ派遣しました。三

もじひつじの

母成峠の戦い

月には仙台藩主伊達慶邦へ会津藩攻撃の命令を伝えます。

仙台藩を初め東北諸藩は会津藩に同情的であったと言われます。しかし、政府側の態度は固く、仙台藩は四月中旬には現在の福島県域へ侵攻し、会津藩との境にある土湯、母成、中山、御霊櫃などの峠に兵を置くことになりました。消極的な仙台藩を監督するため、仙台から参謀の醍醐忠敬や下参謀世良修蔵もまた県内へとやってきました。両藩の最初の戦闘は四月二十日の土湯峠でのものでした。仙台藩瀬上主膳らは前日から布陣し、会津藩と対峙しますが峠を突破することができませんでした。また、仙台藩伊達安芸や大松沢掃部之助などは、さらに南下し本宮宿（安達郡本宮町）にきました。それぞれ中山峠や母成峠を攻撃するためでした。

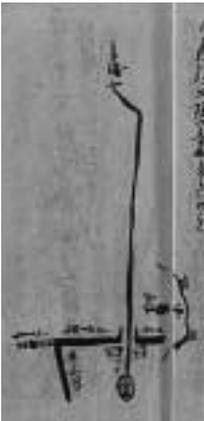
実際に会津藩との本格的な戦闘が行われたのは、翌閏四月に入ってからのことでした。伊達隊は中山峠攻略のため二渡へ、大松沢隊は、母成峠入口の石筵へそれぞれ陣を敷きました。当時会津藩はこれら峠周辺の村落に放火し、敵を攪乱する作戦をとっていました。御霊櫃峠に出陣した仙台藩兵が泊まっていた大槻村（郡山市大槻町）の名主の記録によれば、村民が火の番にかりだされていたそうです。

閏四月一日から三日にかけてそれぞれの峠をめぐる戦いが開始されました。後に新選組が守ることになる母成峠での戦いについて当時の記録から詳しく見てみましょう。四月の後半に石筵へ赴いた仙台勢は、峠入口にある「小敷手山」下に番兵をおきます。「萩岡山」の番所に詰

Q&A

回答者
歴史担当
竹内 浩

める会津藩兵を襲おうと前進しますが、姿が見えずさらに進むと、急に鉄砲を打たれ一時後退します。しかしその後も「萩岡坂」まで前進を試みるのです。また「小敷手山」下に土手を築き始めますが、閏四月中旬になると、会津藩田中源之進と大松沢の使者が話し合いをもち、戦いは収束に向かうのでした。絵図では「小敷手山」をこんもりとした山に描いています。現在でも石筵入口にはそれらしき景観が見られます。また「萩岡」の地名は現在も残って



控手伝手請普手
遠藤精吾 二本松市

いて、ちょうど牧場の南側のあたりを指します。他の峠でも大規模な戦闘は行われませんでした。特にこの頃、宮城県白石で東北諸藩は会津藩救済のための会議を行っている時期でしたので、対会津戦への慎重な思いが兵士たちにも影響していたのかもしれない。

閏四月二十日には新政府軍の支配下にあった東北の入口、白河城を会津藩は攻略します。その後奪還しようとする新政府軍が押し寄せますが、そこには会津藩ばかりではなく、仙台藩や二本松藩そして新選組などが顔を揃えて攻撃から城を守ろうとします。

その後戊辰戦争は新政府軍の攻勢をもって推移し、白河、榎倉、平、三春、二本松と制圧され、ついに八月二十一日母成峠が板垣退助などの軍勢に破られるのでした。二日後、早くも会津若松城追手まで迫り、一ヶ月に及ぶ戦いが続きます。現在の母成峠は新しい道が整備され、当時戦われた道は定かではありません。しかし、両藩が対峙あるいは協力した地、母成峠をもう一度歩き直してみればどうでしょうか。



現在の母成峠を下る古い道



石筵の入口付近

トピックス

常設展示室「歴史・美術テーマ展示」

平成十六年度 第六回展

画題で見る美術

山水画と風景画 街と山河

常設展示室歴史・美術では、さまざまなテーマに基づいて歴史・美術資料を紹介するテーマ展示を行っています。今回は山水画と風景画を紹介するテーマ展示のパート2「画題で見る美術 山水画と風景画」を開催します。

想像上の中国の理想の景観を、主に墨を用いて描いた山水画、京の都など実際の市街の景観を画面上に再構成した洛中洛外図や城下絵図。

広い意味ではこれらは同じ風景画に分類できます。しかし、これらの作品を中心に日本人が描き残した景観の表現を見比べてみると、同じく景観を題材にしてもそこに表現された世界はずいぶん異なることに気づきます。日本絵画の景観表現の幅広さをお楽しみください。

主な展示作品(予定)

雪村 周継「破墨山水図」(福島県立博物館蔵) 写真1

「洛中洛外図屏風」(福島県立博物館蔵)

大須賀清光「会津若松城下絵図・追鳥狩図屏風」

(福島県立博物館蔵)

狩野派諸家「松川十二景和歌色紙帖」(個人蔵)

岩浅 松石「会藩年中行事図」(福島県立博物館蔵)

写真2

会期 平成一七年一月一八日(火)～三月三日(日)

会場 福島県立博物館 常設展示室 歴史・美術



写真1



写真2

春の企画展予告

「**老い**」
日本の文化と
老いの諸相



(題字・斎藤 隆)

急速な高齢化を迎える日本。社会の高齢化は大きな問題となりつつあります。しかし、「老い」は肉体の衰えというマイナス面を抱えるものの、人間の精神活動に深まりと広がりを与えます。すべての文化は成熟を旨指すと言っても過言ではないでしょう。「老い」を避けて文化・社会の成熟はありえませんが、我が国では「老い」はどのように捉えられてきたのでしょうか。「老い」の力・「老い」の姿・「老い」を迎える・「老い」を祝う・「老い」を生きる・「老い」たる神の六つのテーマを設け、中世から近現代までのさまざまな美術工芸品とアートを通して、「老い」について考えてみたいと思います。

春の企画展《老い》は平成一七年四月三日(土)から六月五日(日)まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「蒲生氏郷と保科正之 会津藩政の幕開け」
会期 一月一〇日(月)・祝)まで

「画題で見る美術

山水画と風景画 街と山河」

会期 一月一八日(火)から

三月一三日(日)まで

講演・講座

は要申込

民俗講座

「会津の初市」(上映・解説会)

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 一月八日(土)午後一時半～三時

「東北の刺子と民俗」(上映・解説会)

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 一月三日(日)午後一時半～三時

「昭和村の麻とカラムシ」(上映・解説会)

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 二月五日(土)午後一時半～三時

歴史講座

「古文書入門10 古代」

講師 当館学芸員 竹内 浩

日時 一月一五日(土)午後一時半～三時

「ニューズ映画をみよう」(上映・解説会)
講師 当館学芸員 南雲 修
日時 三月一一日(土)午後一時半～三時

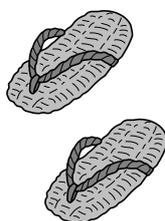
体験講座

「わらびいりをつくろう」(実技)

講師 技術伝承者 鈴木幸雄さん

日時 二月一一日(金)・祝)

午前一〇時～午後三時



「おもちゃをつくろう」(実技)

講師 当館展示解説員

日時 三月一十九日(土)午後一時半～三時

木曜の広場

講師 館長 赤坂 憲雄
学芸員 佐々木長生

場所 講堂 入場無料

会津学事始め 四季の生業と暮らし

第一〇回

「雪の民俗」

日時 一月一三日(木)午後一時半～三時

第一一回

「民具の世界」

日時 二月三日(木)午後一時半～三時

第二二回
「森の文化」
日時 三月三日(木)午後一時半～三時

実演

場所 体験学習室

「昔語り」

語り部 山田登志美さん

日時 三月二〇日(日)・祝)

午後一時半～三時



やさしい展示解説会

* 展示解説員による常設展の展示解説です。

* 毎週土曜日午後二時から(三〇分間)

毎週日曜日午前十一時から(三〇分間)と午後二時から(六〇分間)です。

* なお、都合により開催しないこともありま

すので、ご了承ください。

* その他、行事等の詳細については、
月行事予定表やホームページをご覧ください。

一～三月の休館日

年末年始 一月二七日(月)～一月四日(火)

一月 一一日(火)・一七日(月)・二四日(月)

・三一日(月)

二月 七日(月)・一四日(月)・二一日(月)・

二八日(月)

三月 七日(月)・一四日(月)・二一日(火)・

二八日(月)

* 小・中学生、高校生は常設展を無料で
ご覧いただけます。

